

## 特集◎舞台芸術における アーティスト・イン・レジデンスの活用法

日本におけるアーティスト・イン・レジデンス(AIR)は1990年代から美術を中心に始まったが、演劇やダンスを支援するAIRはまだ少ない。また海外では、劇場やフェスティバル、あるいはアーティストや芸術団体が手がける様々な滞在型のプログラムがあるが、それらに関する情報も十分に伝わっているとは言い難い。本号では、舞台芸術におけるAIRの多様性と可能性について考えるためのヒントとして、国際的に活動を展開する国内外のアーティストに、AIRや類似するプログラム等に滞在した体験談をもとに、その有効な活用法について寄稿していただいた。

01	ダヴィデ・ヴォンパク◎歩みと道程	p.001
02	ワン・チョン◎あるがままに、自分に向き合う	p.005
03	塚原悠也◎コンタクトゴンゾ、レジデンシー列伝	p.007
04	矢内原美邦◎アーティスト・イン・レジデンスの経験と可能性	p.010

### 01

ダヴィデ・ヴォンパク  
David WAMPACH

## 歩みと道程

舞台作品を考え、創作するには、ある程度の時間、スローペースの活動が必要となる。そのためには一人になる必要があるし、日常的に課される制限から逃れる必要がある。あるプロジェクトに取り組む時、私の立場は、孤独の中でインスピレーションや言葉を探し求める作家に近いと感じている。時間がある状態が大切であり、打ち込むべきタスクに向かって全面的に踏み込み、そのような意志をもって真実を探し出すことが大事なのである。私はいつも朝、かなり早く起きて活動することを好む。ひんやりとした空気に触れ、清澄で安息した精神状態で仕事に取り掛かるのだ。舞台芸術のためのレジデンスはまさに私を日常の諸事から解放し、孤独にさせてくれた。各レジデンスは、

あるプロジェクトを扱うにあたり、それぞれの時期に応じて異なるコンテキストを提案してくれる。そこで過ごす時間と空間は、様々な帰結、影響、波紋をもたらすプロジェクトにとって本質的な要素である。

### 様々な場所と遠出の段階

子供のころから、私はよく遠出をしていた。歩きながら瞑想し、問いを立てては解決することもできる。そして、それを創作の必要性和結びつけ、ダンス作品を考えることもできる。2017年のモンペリエ・ダンスに際して作られた『ENDO』のような作品では、滞在した各レジデンスは創作を進めていく上での道標になった。仮に遠出になぞらえて創作活動を考えるならば、それはどこから出発して、どこへ行くのか、出発点と目的地はどこなのかという問いを立てることなのだとと言える。しかし、私たちは本当にはどこを通過しているのか、どのようにその様々な段階が展開していくのかを認識しているわけではない。たしかに、高低差はあるのか、距離は何キロあるのか、天気予報のようないくつかの情報を集めることができる。しかし、私はそれぞれの局面を乗り越える時に生じる困難を簡単に説明することはできない。というも天候の変化や疲労の度合いなど多くのパラメーターがそこには



左右とも:『ENDO』 photo: Martin Colombet

作用しているからである。遠出の様々な段階における困難の度合いを決定するのは、まさにこのような出発前には分からなかった情報なのである。同様に創作の様々な段階においても様々なパラメーターが作用する。多かれ少なかれ類似したことはよく起こるだろう。ここで私が想定しているのはレジデンスの受入条件、宿舎と実際に仕事をするスタジオの間の距離などである。この場合、天候もまたチームメンバーの感情の状態に影響を与える。食事、労働時間、そしてもちろんリサーチの主題もそうである。

『ENDO』というプロジェクトに関して、私は2016年2月と3月にセゾン文化財団のヴィジティング・フェローの資格を得てリサーチ・レジデンスを開始した。寺山修司に関するリサーチである。私は森下スタジオで6週間を有意義に過ごし、寺山と共同作業を行っていた人々に会い、インタビューを行うことができた。リサーチ時にはセゾン文化財団のチームが随行してくれた。彼らはそのような人々との交流やリサーチを援助してくれ、青森県の三沢市寺山修司記念館に行く上で並ならぬ力を尽くしてくれた。このようなリサーチへの随行は、得難い貴重なものだった。

『ENDO』のリサーチには数年を要するだろうと考えていたが、自然な流れで、その年にセゾンでのレジデンスが決まり、カンパニーのメンバー、ダンサー、サウンドクリエイター、照明家、美術家、舞台監督、アシスタントの都合を調整しつつ、ドラマツルギーを考えるために作業カレンダーを作成した。プロダクションチームの助けを得て、私はフランスの国立振付開発センター(CDCN)や国立振付センター(CCN)でのレジデンス候補者に応募した。私たちは、ユゼス国立振付開発センターやピカルディ国立振付開発センター・レシャンジュール、トゥール国立振付センター、モンペリエ国立振付センター、タルブのバルビス国立舞台、パリの国立ダンスセンターで実施されている「スタジオ受入制度」と呼ばれるレジデンス・プログラムからポジティブな回答を得ることができた。また、私たちはスイスのチューリッヒにあるドイツ語で文字通りダンスのメゾン(家)を意味するタンツハウスでもレジデンスの機会を持った。

レジデンスに関するリサーチも長い期間行っていた。ポジティブな回答を得る前に複数の組織に何回も問い合わせをすることはよくあることで、それには様々な理由がある。プロジェクトが審査基準に適合していなかったり、審査員が私の仕事についてよく知らなかったり、実際の舞台を見たことが一度もない場合もある。より単純な理由とし

て、プロジェクトの内容や欠陥そのものによることもある。

こうした理由で、また様々な審査基準を常に知っているわけではないために、レジデンス・プログラムに応募し、申請し続けることが重要だと考える。実際、私はそのように、いくつかの制度や枠組みに対して2回も3回も申請を繰り返してきた。こうした道程は、新しいプログラムを知る機会にもなり、ネットワークを広げることも可能にする。

各レジデンスにはおおよそ2週間の作業を一区切りとして提案し、予め創作の過程

を明確に示していたので、それぞれのレジデンスは創作段階に必要な要求に対して応えてくれた。より明確に言うならば、下記の様々な「アーティスト・イン・レジデンス」を通過することで、『ENDO』の創作の各段階で向き合うべき課題や論点を定めることができたのである:

- セゾン文化財団、東京、2016年2月1日-3月15日: リサーチ、インタビュー、三沢市寺山修司記念館の訪問
- ヴィラ九条山、京都、2016年3月15日-3月25日: 寺山に関するリサーチの続き
- モンペリエ国立振付センター、フランス、2016年6月2日、3日: 技術チームとの打合せ
- バンタン国立ダンスセンター、フランス、2016年6月11日、12日、9月5日-9日: ダンサーとの打合せ
- スタジオ・コンドルセ、ニーム、フランス、2016年12月19日-23日: 振付の素材に関する作業
- ピカルディ国立振付開発センター・レシャンジュール、フランス、2017年1月23日-27日: 画家と美術家との作業に関するリサーチ
- トゥール国立振付センター、フランス、2017年2月13日-24日: 画家と美術家との作業の続き
- タンツハウス・チューリッヒ、スイス、2017年2月27日-3月3日: 振付の素材を構想
- バルビス国立舞台タルブ・ピレネー、フランス、2017年5月29日-6月9日: 音と照明づくり
- モンペリエ・ダンス、フランス、2017年6月19日-25日: 音と照明の最終調整
- モンペリエ・フェスティバル2017、フランス、2017年6月26日、27日: 創作及び初演

創作活動を行い作品を仕上げるために、上述の様々な段階は戦略的に練られ、また各段階には予め明確にすべき特定の課題が含まれていた。

## 創作方法

私は創作のメソッドを持っていたとも、持っていなかったとも言えるだろう。一つの創作方法を習慣化しないように努めていたし、うまくいく方法を探そうとしたわけではない。もたらされる答えがどのようなものであるか、さらには取り掛かっている作品がどのようなものになるか予め判断としないリサーチの領域を探求し、チャレンジする必要があった。そのためむしろ直観的かつ実際の経験に基づいた方法で作業していた。

私がリサーチを進めた方法には、様々な要素が含まれているが、それについてはこのプロジェクトの成立過程を説明した方がよいだろう。



とができるだろうか？ 言い換えれば、維持と放棄、コントロールすることと流れに身を任せること、それら全てが創作の争点となる。重要なのはそのどちらかを選ぶのではなく、それらの間のほどよいバランスを見つけることであり、どちらかの方向に過剰に傾くべきではない。

私が芸術監督を務めているアソシエーション・アクルのようなカンパニーにとって、私個人あるいはチーム全体がレジデンス・プログラムに受け入れられるかどうかは、プロジェクトの成立に関して極めて重要な点である。それにより創作活動に没頭し、レジデンスに認められた時間をリサーチに割り、備えられた設備を使用し、プログラムの受入担当チームと出会うことが可能になるからだ。最後にあげた点は重要である。なぜならば受入チームとの出会いは創作活動を円滑にし、プロジェクトの続きを生み出す可能性があるからである。レジデンスの別のプログラムに改めて招待してもらったこともあれば、後に完成した作品を観客に見せる機会が与えられたこともあった。別のケースでは、あるレジデンスが、作品を上演することへの関心を示した別の組織と引き合わせてくれたこともあった。たとえば、国立振付センターのレジデンス・プログラムでは、完成した作品を必ずしもそこで上演できるとは限らない。しかし上演の機会をもたらすフェスティバルなどはそれを補うものになる。

『ENDO』を創作した時のレジデンスであるピカルディの振付開発センター、トゥール国立振付センター、タルブのパルビス国立舞台とは初めて仕事することができたが、これらの機関とレジデンスの続きや作品上演について話し合っている。

レジデンス・プログラムは創作と上演のための跳躍台である。それは何よりもまず人的なネットワーク、継続可能なパートナーシップを作り出し、別のアプローチの仕方や新たなつながりをもたらしてくれるのである。

翻訳：越智雄磨  
(早稲田大学演劇博物館招聘研究員)



photo: Martin Colombet

### ダヴィデ・ヴォンパク (David Wampach)

ダヴィデ・ヴォンパクはAssociation Achlesを結成し、自身の作品創作を始める。2003年、Pierre Mourlesと『DESRA』を創作し、その後、『CIRCONSCRIT』(2004年)、『BASCULE』(2005年)、『QUATORZE』(2007年)、『AUTO』(2008年)、『BATTERIE』(2008年)、『BATTEMENT』(2009年)を発表している。2011年、パレエ作品の

『くるみ割り人形』を題材に『CASSETTE』を創作。また、同年、『春の祭典』を題材に『SACRE』を創作し、モンペリエ・ダンス・フェスティバルで発表した。その後、『SACRE』の続作として『儀式』と『トランス』をテーマに映画作品『RITE』を製作している。2014年、アソシエイト・アーティスト(2012-2016年)として所属するル・クラテル国立劇場(アレス)の野外フェスティバルのためにデュエット作品『VEINE』を創作。また、2015年、渴望をテーマに6人のダンサーのグループ作品『URGE』をモンペリエ・ダンス・フェスティバルで創作・発表、2016年にKYOTO EXPERIMENTで上演。最新作、『ENDO』はエキゾチズムに疑問を呈するエンドチズムとアクション・アートからインスピレーションを得た作品で、2017年、モンペリエ・ダンスで初演された。その他、『ex.e.r.cel』(モンペリエ国立振付センター)や『EMFOCO』(コンセプション)等の教育プログラムで講師として、また、ImPuls ダンスフェスティバルの教育プログラムである『DanceWEB』のメンターを務めた実績がある。現在、ユセス国立振付開発センターのアソシエイト・アーティスト。  
www.davidwampach.eu

参考: 本文に記載のある主なアーティスト・イン・レジデンスや機関の概要

### モンペリエ国立振付センター(フランス、モンペリエ) CCN Montpellier

モンペリエ国立振付センターはドミニク・バグエやマチルド・モニエが芸術監督を務めていたことで広く知られる国立振付センターで、現在はクリスチャン・リゾーが芸術監督を務め、アーティストのニーズに合わせた様々なレジデンスを実施している。現在、アソシエイト・アーティスト・レジデンスとして、ヴィンセント・デュボンに創作を3年間支援しているほか、創作リサーチを支援するレジデンスや、国内の振付センター等と共同して支援するレジデンス・プログラムを実施している。

URL: <http://ici-ccn.com/> (フランス語)

### パンタン国立ダンスセンター(フランス、パンタン) Centre national de la danse: CND à Pantin

パンタン国立ダンスセンターはパリ郊外のパンタンに所在する国立ダンスセンターで、ダンス公演やリハーサルのための13のスタジオやスクリーニング・ルーム、コンファレンス・ルーム、図書館、レストラン等を有する。創作リサーチを支援するレジデンスを定期的に行っており、年2回の公募による選考を行っている。

URL: <https://www.cnd.fr/> (フランス語)

### ピカルディ国立振付センター・レシジャンジュール(フランス、シャトー・ティエリ) L'échangeur CDC Picardie

ピカルディ国立振付センターは2011年に国立振付開発センター(CDC)の一つとなり、そのミッションの一つである振付の創作と製作の支援の一環として、レジデンス・プログラムを実施している。滞在アーティストはスタジオや宿泊施設を利用できるほか、技術スタッフによるサポートや、共同製作に関するアドバイスや紹介を受けることができる。また、共同製作事業に関しては財政的な支援も行われている。

URL: <http://www.echangeur.org/> (フランス語)

### トゥール国立振付センター(フランス、トゥール) Centre Chorégraphique National de Tours

トゥール国立振付センターは1989年に設立された国立振付センターの一つで、フランス国内のダンスの創造と普及に寄与し、振付家やダンス・カンパニーを対象に作品の創作を支援するレジデンスを実施している。2016/2017年のフェスティバル『Tours d'Horizon』では、フランス国内の8組の振付家、ダンス・カンパニーを招いたレジデンスを行い、創作の支援を行うとともに公開イベントとしてアーティスト・トークを実施している。

URL: <http://www.ccntours.com/> (フランス語)

### タンツハウス・チューリッヒ(スイス、チューリッヒ) Tanzhaus Zürich

タンツハウス・チューリッヒは1996年に「タンツハウス・ヴァッサーヴェルク・チューリッヒTanzhaus Wasserwerk Zürich」として設立され、それ以降、スイスのコンテンポラリーダンスの振興の中心的な役割を担っている。スイス国内外のアーティストを対象とし、ダンス作品の視察リサーチ、創作等を支援するレジデンス・プログラムを実施している。

URL: <http://www.tanzhaus-zuerich.ch/> (ドイツ語・英語)

Email: [info@tanzhaus-zuerich.ch](mailto:info@tanzhaus-zuerich.ch)

### パルビス国立舞台タルブ・ピレネー(フランス、タルブ) Le Parvis Scène Nationale Tarbes-Pyrénées

パルビス国立舞台タルブ・ピレネーは劇場、映画館、ギャラリーを有する複合文化施設で、フランスの国立演劇センター、振付家センターの役割を担っている。そのため、フランス国内の演劇やダンス作品の製作を支援しているが、定期的なレジデンス・プログラムは行われていない。

URL: <http://www.parvis.net/> (フランス語)

### モンペリエ・ダンス(フランス、モンペリエ) Montpellier Danse

モンペリエ・ダンスは修道院として建てられた歴史的建造物をリノベーションし、劇場やスタジオを有するダンスセンター「アゴラ」を拠点に、そのスタジオを活用したレジデンス・プログラムを実施している。滞在アーティストは新作等の創作を目的にスタジオを使用でき、滞在の最後にはオープン・スタジオを行うことが義務付けられている。

URL: <http://www.montpellierdanse.com/> (フランス語)

## 02

ワン・チョン  
WANG Chong

## あるがままに、自分に向き合う

中国で「アーティスト・イン・レジデンス」というのは、とてもクール、かつあまり馴染みがなく、一体どんなものなのか知る者もない。2012年に私がアジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) のレジデンスに申請をした時も、実はよく分かっていなかった。

### ニューヨークのリズム

ニューヨークに着いてから、アーティスト・イン・レジデンスというのは、天国なのだということが分かった。まず、与えられた住まいは国連のすぐそばで、グランド・セントラル駅まで歩いて8分、映画館までは12分、MoMAまでは25分とどこへ行くにも便利だった。この数字は、私が毎回出かける度に計ったもので、ACCからも紹介文の中に書くように言われたのだった。この数字があることで、レジデンスの場所がいかに便利かということが分かるからだ。半年の間で、90の演劇やダンス、音楽などの作品、100の映画を見た。好奇心旺盛だっただけでなく、とにかく交通の便の良かったおかげでもある。

もちろん、交通の便がいいというだけではない。ACCは、資金面でも十分なサポートをしてくれた。衣食住の面で何も心配することがないなか、思う存分芸術に浸ることができた。私は、思い切ってMoMAとニューヨーク・シアター・ワークショップの会員になり、スタンリー・キューブリックの特集上映とリンカーン・センター・フェスティバルのセットチケットを購入した。お金があるからこそ、こういう選択が可能だったのだ。名前だけは知っていたアーティストの作品にも触れられた。例えば、チェン・シージェン (陳士錚、演出家/映画監督)、野村萬斎、サイモン・マクパーニー、リチャード・フォアマン、ポール・テイラー、劇団ではザ・ビルダーズ・アソシエーションやエレベーター・リペア・サービスなど。

レジデンスは、アーティストにほとんどストレスを与えない。ご存

知のとおり、アーティストというのは暇とは無縁だ。というわけで、私も、ジャオ・ピンハオ (趙秉昊、脚本家) のコロンビア大学修士課程の修了作品『Kurukulla』を演出することにした。まさかその後、ジャオと頻繁にコラボレーションをするとは思っていなかったのだけれど、これはニューヨークでの縁といえるだろう。

レジデンス期間の7月、リンカーン・センター・シアターのディレクターズ・ラボ (Directors Lab) に参加した。そのラボには、20カ国、70人の演出家が参加していたので、とにかく賑やかだった。参加していた演出家たちは、アメリカの演出家とは明らかに思考の違いが見られた。参加していたアメリカ以外からの参加者はクリエーションを好んでいたが、アメリカの演出家は、脚本をただ演出するだけだった。

ニューヨークとサンフランシスコの劇場で感じたのは、アメリカの観客は年配者が多いということだ。若い作り手は、大きな声をあげることさえしていない。そこで私が思ったことは、アーティストは、何が何でも変革を求めるべきということだ。そうでなければ、演劇という芸術はあつという間に死んでしまうだろう。演劇が現在のままで変わることがなければ、観客はただただ減る一方だ。

### 小名木川のほとりで

二度目は、2015年12月から2016年1月までの森下でのセゾン文化財団のレジデンスだ。北京から東京に飛び立ったあの日、北京ではPM2.5がひどく、数百メートル先が見えない程だったのが、東京に降り立つと綺麗な空だったのを覚えている。

このレジデンスもニューヨーク同様、十分な資金と豊富な人脈があった。常に明るく元気な久野敦子氏からは、多くのアーティストや組織をご紹介いただいた。そして、慎重かつ真面目な稲村太郎氏は様々な公演に連れて行ってくれた。二人とも、本当に芸術を理解していた。

レジデンスのサポートのおかげで、飢えていたアーティストである私は多数の素晴らしい作品を見ることができた。例えば、坂東玉三郎の『廓文章』、大阪の人形浄瑠璃『国性爺合戦』。ハワイ大学で歌舞伎や浄瑠璃のことも勉強していたので、やっと公演を見ることができて、ただただ興奮した。伝統芸能の演者たちが受けるのは一つの訓練体系と聞く。普通の演者は舞台上で自分の任務を全うすることしかできないが、坂東玉三郎のような名優に輝きがあるのは、役に対



リンカーン・センター・フェスティバルのセットチケット



リンカーン・センター・シアターのディレクターズ・ラボに参加した時の筆者(左)  
photo: 高橋宏幸 TAKAHASHI Hiroyuki



上下とも：結城座で行ったジャオ・ピンハオ脚本『雀去冬来—すずめ さりて ふゆ きたる』のリハーサル(2017年10月) photo: 宮崎光章 Mitsuki Miyazaki

して自分の解釈や独自の情熱が投じられているからだろう。人形浄瑠璃の見どころは、もちろん人形だ。しかし、想像していなかったのだけれど、私が一番目を惹かれたのは、何十年も人形を操るスキルではなく、人形を操る三人の息のあった人形劇だった。また、感情溢れる義太夫節の思い切った歌声には涙した。

森下はとても静かなところだった。午後、何もすることがなければ、小説『紅樓夢』を持って小名木川のほとりで読書をしていた。ストレスもなければ何の目的もない。あるのは、冬の太陽の光と穏やかな気持ちだ。鴨が川をゆき、野球少年が走っているそばで、私はすっかり本の世界に入り込んでいた。

レジデンス期間中、2017年に結城座との共作が決まった。また、結城孫三郎氏の作品も拝見し、未知の伝統芸能を勉強するようになった。言語と文化を越えての国際共同制作を成功させるには、縁や勇気や資金以上に必要なのは双方が深く理解をしてやり取りを重ねることだ。このような理解というのは、一挙に成し遂げられるものではない。セゾン文化財団のレジデンスは、そんな私たちに時間を与えてくれた。

## 大切なこと

2回のレジデンスの後、2017年10月、結城座でジャオ・ピンハオ脚本の『雀去冬来—すずめ さりて ふゆ きたる』のリハーサルがスタートした。今回のクリエイションのために、私は早くからトーキョーアーツアンドスペースのレジデンスに申請をしていた。演劇人にはあまりレジデンスの機会を与えていないと聞いてはいたけれど、幸い私はレジデンスのチャンスを得た。約1年の間をあけた東京での2つのレジ

デンスは、一つの作品によって繋がったのだ。連日、両国と武蔵小金井の間を行き来した。毎日6時間から9時間のリハーサル。シャワーを浴びるだけで、服を洗う時間はなかった。お昼ご飯は時間が不規則、かつ適当に取っていたので、さらに痩せた。11月22日は、20日間のリハーサルのうちの唯一の休みだった。その日、私は映画祭に行き映画を5本見て、さらにパソコンでも3本映画を見た。極端な方法でレジデンスを有意義に過ごした。

## 桃源郷と道場

3つのレジデンスの期間やサポート、内容にはそれぞれ違いがある。身についたことも、それぞれに良いものがあった。アーティスト・イン・レジデンスは、表面的には部屋とお金が与えられるというものだが、実際はそんなに単純なものではない。

レジデンスとはプラットフォームであり、その土地のアーティストや観客と触れ合える場だ。

レジデンスとは桃源郷であり、知り尽くし、飽きていた日常世界から離れて、新たな未知の世界に向き合える異境地の冒険に連れて行ってくれる。

レジデンスとは道場であり、あるがままの姿にされ、自分に向き合う場になるのだ。

翻訳：小山ひとみ

(フェスティバル/トーキョー 中国プログラム・コーディネーター)

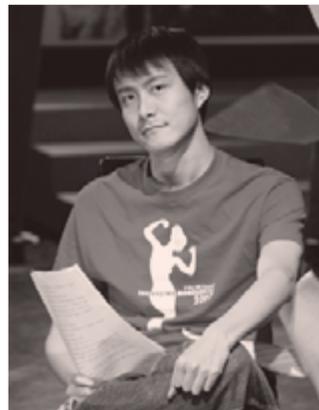


photo: 周京

## ワン・チョン (Wang Chong)

1982年、北京生まれ。演出家、劇作家、翻訳家。薪伝実験劇団主宰。北京大学で経済と法律を専攻し、ハワイ大学で演劇を研究し修士号を取得。2008年、北京にて薪伝実験劇団を設立。ドキュメンタリー演劇やマルチメディアの手法を取り入れた作品を創作する。2012年、利賀村で開催されたアジア演出家フェスティバルに参加。2013年、F/T公募プログラムで『地雷戦 2.0』を発表し、『F/T アワード』を受賞。2014年、フェスティバル/トーキョー 14で『ゴースト 2.0 ～イブセン「幽霊」より』を発表した。また、2016年に発表した『Lu Xun (大先生)』は2016年の中国最優秀演出作品に選出された。2017年、結城座と共同し、人形芝居、『雀去冬来—すずめ さりて ふゆ きたる』を発表したほか、APAF—アジア舞台芸術人材育成部門の国際共同クリエイション公演で、『Kiss Kiss Bang Bang 2.0』を発表している。

<http://hanenaka.wixsite.com/theatre-du-reve>

参考：本文で紹介されている機関の概要

## アジア・カルチュラル・カウンシル Asian Cultural Council

アジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) は、米国およびアジア諸国におけるビジュアル、パフォーマンスアーツの芸術家や専門家を対象に国際文化交流を支援する米国の非営利財団。母国以外の米国・アジア諸国へ渡航し、調査研究を行う個人を支援するフェロシップを提供している。ニューヨーク本部のほか、東京、香港、台湾、マニラに拠点を持つ。セゾン文化財団は1989年よりACCの日本プログラムを支援している。

日本オフィスURL: <http://www.asianculturalcouncil.org/japan/>

03

塚原悠也

Yuya TSUKAHARA

## コンタクトゴンゾ、 レジデンシー列伝

レジデンシーとは何か。ちょっと僕らの場合は定義が他ときっちり合ってくるのか不明なので、ここでは地元関西ではなく別の現場に呼ばれてそこで新作を作るということに限定します。まあ大体そうか。例えば海外で初めて会うミュージシャンと会って次の日に公演ということもたくさんやっているのです。そういう状況は今回省いた。また国内でも色々な場所で作らせてもらっているが字数の関係で今回は海外編ということですすめたい。ここでは「レジデンシー」をすることによって何をえられるのか、どう活用できるのかということに注視したい。長期滞在して異文化に触れ合えたで、っていうこと以外で。

### 01 / 受け入れ先なし

2008 / ヘルシンキ・フィンランド・30日間滞在

受け入れ先なし、というかこれは大阪で受賞した現代美術のアワードの特賞というかそこで得た活動予算でヘルシンキに行った。たしか130万ほどの予算を得て展覧会を作るといふもので、皮肉にもパフォーマンスアーツではなく現代美術の予算が僕らを本格的に海外に送り出してくれた。大阪府の予算だが、やたらと予算カットを叫ぶ知事にちょうど変わったので「文化」なんかも当然標的にされ事務局もあまり大きく宣伝せず、知られる前にざっと行ってくれという雰囲気の中に出かけたことを思い出す。なぜヘルシンキかというと僕が雑誌で見つけた記事で、ヘルシンキでは核シェルターでスケボーをしているという内容のものを見つけたのがきっかけで、核シェルターに行き、身近にそういったものがあるということはどういう気持ちか知りたくて行った。1ヶ月の滞在でヘルシンキ3週間、北の端の北極圏の街イナリに1週間弱のキャンプという塩梅。ヘルシンキでは毎日、中心地の地下道を歩き回って、いい地下空間があると撮影をするという日々。地下に降りて行って大きなドアを開けると広大な光景が広がっている。当時1ユーロがたしか180円ほどで、用意してもらった滞在費もどんどんビールに消えて行った。そのまま金もなくなりつつあるなかでイナリという北極圏の湖の街へ移動。延々バスと電車を使い継いでめちゃくちゃ小さな街にたどり着き、さらにハズレの森を探して芋虫みたいなめちゃくちゃ小さいテントを張った。森では毎日薪を集めて火を起しそれで飯を作った。ほぼ毎日リゾットとか米と何かを混ぜて炊くだけのもの。水は街のハズレにある、原住民であるサーミ人博物館のトイレで、持ってきたペットボトルをこっそり満杯にして持って帰った。サーミ人にめちゃくちゃ感謝したことを覚えている。最終日はとっておきのツナ缶とスパイスミックスでめちゃくちゃうまい飯を作り、それをおにぎりにしてバスに乗り込んだ。しかし街に戻るに連れてそのおにぎりは相対的にどんどんみすばらしいゴミのように見えてきて悲しい現実を思い知った。このとき撮影した核シェル

ターと森の映像はその数年後、国立国際美術館でも展示して、さらにそのオープニングの数日後に日本で原発が爆発した。

### 02 / シアター・ワークス チョイ・カファイ作「RPM」出演

2009 / シンガポール・28日間滞在

ダンスボックスの絡みで知り合ったチョイ・カファイが連絡をくれて自分がディレクターとして働いている劇場で新作を作るので出演してくれという話になった。シンガポールは初めてで、僕らは予算の都合上リトルインディアという現地のドヤ街の、めちゃくちゃ安そうな宿に滞在。僕らの部屋は比較的広めで3人でゆったりと使えたが、たまに歩きながら他の部屋をのぞくとパキスタンなどからくる建設労働者が4人部屋のようなところに10人くらい寝ていて、自分たちはなんと恵まれているのかと思いついた。このリトルインディアは他のいわゆる整備されたシンガポールと正反対で、ごちゃごちゃしていて色々な料理が安価で食べられるのでとても楽しかった。最近ではジェントリフィケーションが進んでいる様子。風俗嬢もたくさんいて25シンガポールドル(約2,000円)で体を売っていて大層驚いた。あとはこのときいた若いメンバーも滞在中に何か仕事をしてよ、ということでシンガポールの色々な果物を調査する仕事をやり始めて、毎晩めちゃくちゃ苦いものとか酸っぱいものとかを買ってきて皆で試した。作品は、自分たちは出演のみで実際のディレクションはカファイが行った。このときから出演だけっていうのはあまり向いていないと感じた。もっと作品のコアに絡んで行かなくてはいけないと。激弱Wi-Fi。

### 03 / フライブルク市立劇場

2013 / フライブルク・ドイツ・28日間滞在

フライブルク市の市立劇場で行われたパフォーマンス・フェスに参加。合計3週間強の制作期間で毎日何かしらの活動を展開。このレジデンシーはYCAM(山口情報芸術センター)との仕事で知り合ったメディア・アーティストのyang02氏に帯同してもらった。この期間に宿で簡易のワークショップなども行ってもらい、最先端のメディア・アートの状況や、その考え方を体感することによって、結果的にその後のゲーム制作などにつながったと言える。現地では劇場のシステムを自由に使い切るというようなミッションを受けており、様々な場所でパフォーマンスの撮影をして毎晩編集をして翌日展示をした。しかしながら強固なシステムを持つ地方劇場はゴンゾが様々な場所を自由に闊歩することをあまりよく思わなかったようで劇場側としては問題になった模様。このレジデンシーはヤスミン・ゴデールのチームと平行で行われており、たくさん話することができたので向こうの進め方や考え方を知ることができてよかった。宿は地元のAirbnbで明らかに人数に対して狭かった。こういう時はちゃんと主催者に言えば大体の場合なんとかしてくれるのだが、なんとなくおもしろいかなと思って言わなかった。毎晩飲みまくり。激弱Wi-Fi。

### 04 / ムーゼントゥルム01

2014 / フランクフルト・ドイツ・12日間滞在

フランクフルトの市立劇場でのレジデンシー。この年、フランクフ

ルト最大の文化イベント「ブックフェア」が「インドネシア」を特集したことにより各劇場や美術館がインドネシア関連のイベントを展開。劇場の要請でジャカルタを拠点にする美術家集団ルアンルパのレザ兄貴を紹介し、そのままゴンゾもこの企画に参加することになった。フランクフルトを拠点とする建築デザインチーム「Yard Works Design」とジャカルタを拠点とする「Art Lab」との共作となる舞台作品を作った。このときは劇場の上層階にある施設に宿泊。なかなか立派な宿を数部屋抱えていて快適であった。激弱Wi-Fi。



リガの素晴らしい市場で入手した食材を使って牛の腱のスープを作った。



アーネムで提供された元病院だった宿では、カーテンなどを利用して個人空間を形成。

## 05 / ダンス・ムーブ・シティ

### 2014 / リガ・ラトビア編・21日間滞在

ラトビアの首都リガにあるゲットー区域での創作。タイトルとおり、劇場ではなく街の中でパフォーマンスを発表するというプロジェクト。主催は現地のオーガナイザーのグループ。現地のダンサー7名と3週間のワークショップを経て作品を発表するもの。割と時間をかけることができたのでゆっくりと色々な話をしたり、映像を見たりすることによって創作ができた。リハーサルはすべて公園、または僕たちが泊まっている宿を利用した。ダンサーの人たちは基本的にこれまで受けてきた訓練を基にした動き方のクセがとても強いので、ゴンゾのぶつかり合いをしてもらい、それを撮影して、どこが物理的に無駄な動きか、装飾が行われてしまっているのかを解説し、徐々にまるでこれまで訓練を受けたことのない人のような動きを作っていった。はじめは難航するかと思われたクリエーションもゆっくり話すとう理解はしてもらえる。おそらく彼らがこれまでやったことのないようなリハしかしていない。リガは市場が素晴らしく毎日の料理がたのしい。激弱Wi-Fi。

## 06 / ダンス・ムーブ・シティ

### 2014 / テルニ・イタリア編・8日間滞在

リガでの発表を終えてそのままテルニというイタリアのローマ近くの小さな街へ行った。街の中心に鉄鋼所があり、産業としてはそのことに頼っているよう。参加メンバーは6名ほどのダンサーチーム。驚くのは、こんな小さな街にもちゃんとコンテンポラリーダンスをやるダンサーがいるということか。全員が地元ということではないが。このアートセンターがリガと共同でゴンゾを招聘。ただしイタリアでの滞在は8日ほどだったのであまり細かく作り込まず、リハーサルもダンボールで防御服を作り、破片でしばき合うことや、全員で街のはずれの山を登るなど割と荒いことを中心に置いてテンションを高めにパフォーマンスまで持ち込んだ。とはいえなかなか素晴らしいチームが形成され、身体的な強度のない参加ダンサーも最後まで盛り上げてくれた。それからイタリアのジェラートはとてもうまい。子供のミドルネームを「アマレーナ」にしようか本気で迷った。ホテルは普通Wi-Fi。

## 07 / ソンズビーク2016

### 2016 / アーネム・オランダ・10日間滞在

ジャカルタのルアンルパというキュレーターや美術家の集団がキュレーションを務めたオランダの野外彫刻展に参加。このチームは以前から知り合いで彼らのフェスに参加したりもしている。アーネムという街で現地のダンサー2人とのコラボでパフォーマンスを発表。この企画もゴンゾが主導で公園のみでリハーサルを行う。広大な敷地を持つ古い公園だったので、長時間をかけたかくれんぼなどを行う。宿がおもしろく、閉鎖した障害者施設を簡易にリノベーションしたもので病院のような狭い部屋にゴンゾは3人で宿泊。でかいフェスなので参加作家も多く、コストを下げた結果だろう。なんていうか難民キャンプのよう。カーテンなどをうまく利用して個人空間を形成。他にもたくさんのインドネシア人が20人くらい宿泊していて色々な知り合いができた。よく知っている友達によられると、OK、なんでもいいで、という気持ちになる。結局は持ちつ持たれつなので。台所には常に野菜や肉が常備され勝手に使っていいという今までにないシステムが採用されていた。これもパーディアム(日当)というシステムがあまりない美術界ならではの。スーパー激弱Wi-Fi。

## 08 / レイキャビク・ダンスフェスティバル

### 2016 / レイキャビク・アイスランド・5日間滞在

ゴンゾ最短記録の5日での創作。2回目のレイキャビク・ダンスフェス。ドイツを中心にしたツアーの間に入れ込んだ企画。毎回、ディレクターが招待してくれるクジラBBQが楽しみ。現地の人々と作品を作って欲しいというオーダーだったので、ゴンゾ的には時間のかからない非ダンサーを集めて欲しいとオーダーし、結果半分くらいがダンサーを含んだ15人位が集まってくれた。ただし初日で3人ほどが脱落。最終日までに5人くらいが脱落。残ったメンツとまた山登りなどを行い、結束を強めてパフォーマンスを行う。テクニカルスタッフにも出演してもらうなど、荒く構成したが、かなり成功しこれを見ていた別のイギリスから来ていたディレクターと次の仕事の話につながった。アイスランドの人々はヨーロッパ本土とやはり少し雰囲気異なる。山も木がほとんどなく、とても不思議な風景であった。宿は建てられたばかりのAirbnbで思っていたより好Wi-Fi。

## 09 / ムーゾントゥルム02

## 2017 / フランクフルト・ドイツ・14日間滞在

以前もコラボをした建築デザインチームとの第2作。彼らが自分たちの地元の街(フランクフルトの隣町オッフェンバッハ)に建てたギャラリーがあり(さすが建築デザイン卒)、さらにこの企画のためにその前に70平米ほどのプールを作った。これをドイツ伝統の湖のほとりのオペラ(よくわかってない)と見立ててダウントウンでパフォーマンスを行った。芸術大学を誘致して今まさに再開発されようとしているちょっと荒れ地域。なぜか消防用の水道が使えたので(市に料金を払えばいいらしい)大量の水を使った。垂直に10メートルくらい飛ぶのでお客さんも傘をさしながら観る。短い滞在に思えたが、既に知っているチームとの協働で、毎日ドラマトゥルクの入ったミーティングをきっちりやることによってギリギリ作品は間に合ったように思う。というかいい作品になった。近くのアジアンマーケットで食材を揃えて自炊しまくり。滞在先はAirbnbで好Wi-Fi。

## まとめ

はっきり言って、包括できるような事柄が見当たらない。読んでいただいたとおり、それぞれの状況で作るものや期間がバラバラすぎた。自分でも驚きた。ひとつ言えるとするれば、ほとんどのレジデンシープロジェクトが集団をよりタフにしたということではないだろうか。宿がおもしろいけどひどいとか、自転車のサドルが全員高すぎるとか、現地参加者が思った以上に脱落したり、ビールを飲みすぎて滞在中に滞在費がなくなるかもとか、そもそもテント泊で毎日雨でひろった薪がすべて濡れているとか(飯が作れない)、ゴンゾじゃなくてダンスした

参考: 本文に記載のある主なアーティスト・イン・レジデンスや機関の概要

シアター・ワークス(シンガポール)  
TheatreWorks

シアター・ワークスは1985年に設立された劇団で、劇団としての創作活動以外に、劇作家を育成するプログラムや多分野のアーティストを対象としたレジデンシー・プログラムを手掛けている。また、ゲーテ・インスティテュート・シンガポールと提携し、2018年からは新たなレジデンシー・プログラムとして、東南アジアの若手キュレーターを対象とした「The Curator Academy」をスタートした。

URL: <http://theatreworks.org.sg/>

Email: [tworks@singnet.com.sg](mailto:tworks@singnet.com.sg)

フライブルク市立劇場(ドイツ、フライブルク)  
Theater Freiburg

フライブルク市立劇場は1867年から本格的な活動が始まった劇場で、現在の建物は1910年に完成した。主にオペラ、演劇、ダンス、クラシック音楽の公演を行い、定期的なレジデンシー・プログラムは実施していない。

URL: <http://www.theater.freiburg.de/> (ドイツ語)

クンストラーハウス・ムーゾントゥルム(ドイツ、フランクフルト)  
Künstlerhaus Mousonturm

クンストラーハウス・ムーゾントゥルムは1920年代に建てられた工場を改装し、1988年にオープンしたプロダクションハウス。定期的なレジデンシー・プログラムは実施していないが、過去にドイツ銀行財団と提携したフェスティバル「Plateaux」の一環として、演劇やダンス、パフォーマンス・アートの分野で活動する若手アーティストを対象に新作の創作と発表を促すレジデンシーを実施した。

URL: <http://www.mousonturm.de/> (ドイツ語・英語)

Email: [info@mousonturm.de](mailto:info@mousonturm.de)

すぎてモチベーションの上がないダンサーとか(しらんがな)、主催団体が破産? したとかで帰国して支払いがないからメール上で大ゲンカしてお前らのやり口を全部記事にするなどと脅す(これで支払われた)とか、こういった事柄は本当に自分たちを強くする。自分たちが何をしたくてわざわざ海外まで行くのか、地元でこれらすべてができれば、そしてあれだけのギャラがあればいいのといつも思うが、やはり遠出して状況に巻き込まれることによって、またそこで粘ることによって得られる経験は貴重だ。

できるだけ荒い現場へ行くことをお勧めする。



塚原悠也(つかはら・ゆうや)

2006年にダンサーの垣尾優と共に「contact Gonzo」を大阪にて結成。公園や街中で殴り合いのように見える即興的な身体の接触を開始。contact Gonzoとして、ニューヨーク近代美術館(MoMA)や、アジア、ヨーロッパ各国でのダンスフェスティバルなどに多数参加。国内では森美術館「六本木クロッシング」や国立国際美術館「風穴」展、山口情報芸術センター(YCAM)などでの現代美術展にも参加し、映像、写真、日記などを組み合わせたインスタレーション作品を多数発表。個人名義の活動としては、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館にて2015年より始まったパフォーマンス・プログラム「play」にて3年連続でシリーズ作品を発表。パフォーマンス・プログラムやアートのベースのディレクションなども行う。2011年度から2017年度まで当財団のセゾン・フェロー対象アーティスト。

<http://contactgonzo.blogspot.jp/>

ダンス・ムーブ・シティ(ラトビア、リガ/イタリア、テルニ/ポーランド、クラクフ)  
Dance Moves Cities

ダンス・ムーブ・シティはラトビアのNew Theatre Institute of Latvia、イタリアのIndisciplinateポーランドのKrakow Theatrical Reminiscencesの3つ機関が提携し、2014年に実施したプロジェクト。各都市で国際的に活躍する振付家やダンサーを4組、招へいし、約1ヶ月のレジデンシーを実施して滞在制作やワークショップを行った。

URL: <http://www.dancemovescities.eu/> (英語)

ソンスビーク(オランダ、アーネム)  
Sonsbeek

ソンスビークは第二次世界大戦で破壊されたアーネムに新しい息吹をもたらすために1949年に始まった現代美術展で、これまでに11回の国際展を開催している。直近の2016年のエディションではジャカルタを拠点にアーティストが主導して設立した非営利団体「ルアンルバ」をキュレーターに迎えた。

URL: <http://www.sonsbeek.org/> (オランダ語・英語)

Email: [info@sonsbeek.org](mailto:info@sonsbeek.org)

レイキャビク・ダンスフェスティバル(アイスランド、レイキャビク)  
Reykjavik Dance Festival

レイキャビク・ダンスフェスティバルは2002年にスタートし、毎年、8月にアイスランド国内外のアーティストの作品を上演するダンスフェスティバルを開催している。2018年8月のフェスティバルはレジデンシーとワークショップを中心にプログラムを展開予定。過去にレジデンシー・プログラムでは4名のアーティストを招へいし、滞在制作やワークショップ等を通じて地域を巻き込む創作を促し、作品発表を行った。

URL: <http://www.reykjavikdancefestival.com/>

Email: [info@reykjavikdancefestival.is](mailto:info@reykjavikdancefestival.is)

04

矢内原美邦

Mikuni YANAIHARA

## アーティスト・イン・レジデンスの経験と可能性

物質だけがあるのではなく、ただ精神があるだけでもなく、私たちは純粋に物理法則にしたがって生きているのではなく、あくまで私たちの精神、心と関わったものとして物質があり、独特の生の持続の中で生きているのだ。と、どうもそういうことらしいです。

アンリ・ベルクソンという私の好きな哲学者がいます。『物質と記憶』という本を8年かけて書き上げた人です。私はこの本の意味がわかるまでに10年以上かかりました。わかったと言っても10年かけてほんの少しです。「ほんの少し」は「わかった」とは言わないのかもしれませんが。それでもいくつかの言葉が私の悩みを解決してきたことは事実です。人生に悩むのなら哲学を学びなさい、という哲学者の言葉があります。なにが物事を理解するには途方もない時間がかかります。どんなに時間をかけても理解できないこともあるでしょう。

これまで私がアーティスト・イン・レジデンスで経験してきた物事の多くは、ベルクソンの言っていることにある部分で集約されるように思います。独特の生の中で生きるということは、なかなかうまく説明できませんが、たとえばこれをダンスにたとえると、バレエや舞踏、ヒップホップ、コンテンポラリーなどなど。いまやもうそれぞれの神様を信じた人によって作られた振り付けはスタイル化されてしまいました。その宗教のなかでは、教典にはないそれまでと違う振りなんてありえないということです。

ダンスにたとえようとして思わず宗教にたとえてしまいましたが、それぞれの世界の約束事は常々頑固に守られており、それを崩すことなんてなかなかできるものではなく、できたとしてもそこに待っているのは破門という結果だけということです。そうして私はいつも言われてきました。「お前の振りはダンスではない」「それは演劇ではない」と。そもそもそうした約束事がイヤで一般世界から墮落したはずのアーティストの多くが、その墮ちた世界で寄り集まり合い、そこでまた新たな約束事を作り出しています。それぞれ自分の神様だけいればいいはずなのに、いつか同じ神様がいつまでもそこに存在するのです。そしてこれを信仰する方々は罪悪感もなく、ただそれをなぞるようにみんなで崇めます。もうそうやってきたら私にとって表現は途端に信じるに値するものではなくります。いつまでも同じ神様を崇め続けるなんて私にはずっと信じられなかった。

### 多様なアーティスト・イン・レジデンスでの学び

残念ながら「ダンス」は、様々な芸術と比べて、いまだもってはるかに遅れた世界にあります。光栄なことに、私はこれまで何度かアーティスト・イン・レジデンスの機会をいただきましたが、初めて私がレジデンスしたのはドイツのベルリンにあるヘッベル・アム・ウーファ劇場(HAU)でした。20年ほど前でしょうか。私が受けた当初は30歳以

下の振付家に限られ、書類と電話での面接などいくつかの審査がありました。当時、美術におけるアーティスト・イン・レジデンスの多様性に比べ、パフォーミングアーツにおけるそれはまだまだ未開で、当時レジデンスを行っていたのは、ヨーロッパのいくつかの場所と、アメリカ(ニューヨーク)だけで、日本はもちろん、アジアではひとつも見つけることができなかったように記憶しています。もちろん当時インターネットの情報は限られていたので定かではありませんが、いずれにせよ情報を見つけれ、運よく受かったのが、このHAUと、その次にレジデンスしたニューヨークのダンス・シアター・ワークショップでした。

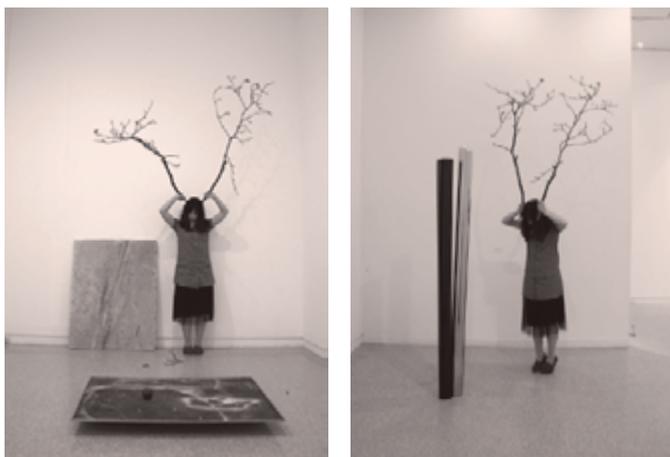
この時の私はまだ若く、与えられたプロジェクトをこなすのがやっとでした。とくに参加条件が30歳以下のまだ若いアーティストに限定され、教わる、知る、を基盤に様々なプロフェッショナルな方々にサポートしていただくというものだったので、ついていだけで必死です。それにくわえ現地で若手の振付家との交流、コラボレーション制作、ワークショップへの参加、作品観劇、成果発表、と内容もとても充実していました。

現在はあらゆる場所であらゆるスタイルのレジデンスがありますが、当時すでにこうした様々なサポートのある手厚いシステムがドイツやニューヨークにはあり、いま思い返せばアーティストが将来社会にもたらす可能性を信じて、若手をサポートしていたのだと強く感じたりもします。いちばん最初に、それも若い20代の頃にこうしたレジデンスを経験しておいてよかったと思っています。

その後は、主に現代美術を中心としたレジデンスとして、台北国際芸術村、韓国国立現代美術館(MMCA)などに行きました。台湾は横浜市と台北市の国際交流プログラムの一環で、韓国のレジデンスは公募で35歳以下限定でした。当時、アジアでは舞台芸術の人が応募してくるのはめずらしく、「ダンスですか? まだ舞台芸術のアーティストを受け入れたことがないんですが、レジデンスをして何をされるんですか?」と、どこへ行っても聞かれたのを覚えています。前例がないという理由で断られるケースもありましたが、受け入れてくれたいくつかの施設は現代美術のフィールドにおいてもパフォーミングアーツの



【身体のある風景】  
レジデンスで作った作品



左右とも：『鹿になる』@MMCA Residency Changdong & Goyang  
 鹿になってただそこにいて人の価値観を問い直す作品  
 人間と動物の間にある違いや感覚、また、見ている人は鹿の角が置いてありますので、  
 誰でも鹿と一緒にすることができます。

可能性を感じていてくれたのだと思います。

しかしながら、そうした美術の分野で行われているレジデンスのいくつかは、それまで経験したものと大きな違いがありました。それらの多くは成果発表のようなレジデンス中になにかしらの作品を制作することを必ずしも求めません。彼らが提示するのは、その場所で日々を過ごしてほしいという漠然としたものが多かったのです。こちらが求めなければ発表の場もありません。極端に言えば滞在中作品を作らなくてもよいということです。これには自主性が求められます。この日々を過ごすという課題には当時不安を感じるものが多かったのですが、表現というものが、なにか発表の場のためだけにあるのではなく、日常生活の場所までおいてこないと本当の表現にはならないということを学んだように思います。そのことに受け入れる側は早急な結果を求めないということです。アーティストとしてどうやって日常を過ごし、日々なにを考え、よく観察し、それについて調べ、なにが必要で不要かを自分で考え、選び、プランを立て、人と会い、物と出会い、風景と出会い、その国の視点から物事を考えたり、それを受け入れ、ひとつの物事には想像を遥かにこえたアプローチがあるのだということを学び、それらは経験として、いつしか作品という形で自分に返って来る物になるだろうし、もしかしたらそれを誰かに分けることもできるかもしれないと感じています。日々過ごす。ここにアーティストとして「考える」という力が求められます。

ここでいう「考える」とは、ただ傍観するという状態ではなく、対象と私自身がある親密な関係に入り込むという状況です。私の場合はダンサーや役者、スタッフ、関係者やお客さんも含めて、彼らを信頼して、彼らと交わる、ということが「考える」ことでした。それは、20代の頃の様々な方のサポートのもと与えられたレジデンスとは違い、自分自身の感性が揺さぶられるものを生活の中に見出し、社会との関係性を新しい方法で探してみるというレジデンスでした。

このようにレジデンスには様々なスタイルがありますが、振付家として、アーティストとして、それぞれの場所で貴重な経験をさせていただいたと思います。もしあの日、あの時、あの場所というものがないと、思い返すことも度々あります。レジデンスではいつもの風景、いつもの人々から完全に切り離されていますので、普段日常の中では出会わない人に出会い、普段だったら深く突き詰められないことを突

き詰め、経験の具体性があるがままに受け取る目的があるように思います。それぞれは小さな経験だったり、小さなプロジェクトだったりするわけですが、この小さなプロジェクトがより良い未来を作っていく可能性もあるからです。

## 日本人という自覚の芽生え

レジデンスでの経験は、私以外の者にはなれない。日本人という者以外にはなれない。ということを私に与えてくれました。それは日本以外でのレジデンスではより強く感じました。つまり私という人間が生まれたその条件というものを自覚して、大切にしなければいけないということです。

そのことをより強く意識するようになったのが、文化交流使としてアジアを回ったときのことでした。それまでのレジデンスでの経験がとも役に立ったと思っています。これまでも何度となくアジアの国々へ行く機会をいただいていたが、とくにここ数年はその機会が増えたように思います。もちろんそれはこの国がすすめるアジア戦略と無関係ではないでしょう。欧米よりも歴史的にも密接な関係にあるアジアの国々は素晴らしい経験を私に与えてくれますが、それでもアジアの国々に行くたびに、なぜいま私はこの国にいるのか？というレジデンスではいつもふと感じる素朴な疑問を浮き彫りにします。ここで私ができることはいったいなんだろうと。

ベトナムのホーチミンの郊外に行ったとき、そこで日本の知人に偶然出会いました。彼はある日本の企業団体から派遣されていて、ざっくり言えば、ベトナムの中小企業に日本の技術を提供し、経済的な発展を助けるという目的で来ていました。「あなたはなぜ来ているの？」と彼に聞かれて、私は言葉につまりました。それは、ごくたわいもない挨拶的な質問だったのですが、あなたがここに来ることで、この国にたいして、ひいてはアジアにたいしてどんな意味があるのかと、そんなふうに聞かれているようで、もっともらしい大義を述べるのも、なんだか気恥ずかしい思いがしました。

彼と別れてからタクシーでホーチミンへ帰る途中、果てしなく広がる田んぼが車窓から見えました。そこには田んぼを耕している水牛を連れたひとりの老人がいました。そののどかな田園風景を眺めながら、もしその老人に同じ質問をされたなら、私はなんと答えることができるのだろうと考えていました。

きっと、いま日本がアジアの国々にたいして、なにかを与えることなんてできないだろう。そんなふうにその老人に教えられたような気がします。もちろん経済と芸術を比べることはできませんし、芸術や文化はすぐに結果のでるものではないので、そこに大義を述べること自体、ナンセンスなことかもしれませんが、その答えを見つけることこそが、そこにいる理由なのかもしれない。そんなふうに思いました。

アジアにはたくさんの国がありますが、当然のことながら、それぞれに生活レベルも違いますし、モノの価値観も違うでしょう。言語も、宗教も、民族もみんな違います。アジアの歴史について述べれば、先の大戦で日本の被害を受けなかった国を探すが大変かもしれません。そんな状況の中で、その国によってなにがどのように違うのかをちゃんと感じながら、これからどのような活動をしていくべきなのかを考えていきたいと思っています。

## そこにおいて日々過ごすこと

自分のスタートはどこにあるのか? ずっと考え続けてきました。その答えは、ああそうなのか、と思うこともあり、やっぱり違うのか、と思うこともあり、もっと別の答えがあるのではないかと、いつも人と会うたびに感じています。その人、その国の立場にたつて物事を見つめることで、自分たちの国の在り方も見えてくるようにも思います。

レジデンスのようにある一定期間その場所で生活することは、旅行はもちろんのこと、公演や展示などでその場所を訪れるのともまったく違います。ただそこにおいて日々を過ごすことがもたらす経験に他では培うことのできない時間を感じます。そこにはベルクソンの言う「独特の生の持続」があるわけです。

本来、舞台芸術とは、多くの人と関わる芸術であり、そこに関わるすべての人たち一人ひとりのことを考える、そこにいる相手のことを想像することだと思っています。

私たちは人と出会って、話をして、これから自分たちの国でどのように活動していくのかを考えていかなければいけません。作品がどこかの誰かの心に届き、世界が変わるかもしれないなどとささやかに思いながら、単発的なことから持続的なものに移行しながら、多くの方々のサポートを通してみんなで一緒に考え、そしてシェアしていくのです。何かを習ったり、教わったりするだけではなく、ただ一緒に時を過ごし考えることができれば社会は良い方向に変化していくと私は信じています。



矢内原美邦 (やいはら みくに)

ニブロール主宰。日常的な身振りをベースに現代をドライブに提示する独自の振付で国内世界各地のフェスティバルなどにも招聘される。劇作・演出も手がけ2012年岸田國士戯曲賞を受賞。off-Nibroll名義で美術作品の制作も行い、上海ビエンナーレ、大原美術館、森美術館などの展覧会に参加。ダンスと演劇、美術などの領域を行き交いながら作品制作を行う。2001年ランコントレ・コレオグラフィック・アンテルナショナル・ドゥ・セヌ・サン・ドニ・ナショナル賞、2007年に第1回日本ダンスフォーラム大賞受賞、2012年に横浜市文化芸術奨励賞を受賞。近畿大学舞台芸術准教授。2008年度から2010年度まで当財団のセゾン・フェロー対象アーティスト。

<http://www.nibroll.com/>

参考: 本文に記載のある主なアーティスト・イン・レジデンスや機関の概要

### ヘッベル・アム・ウーファ劇場(ドイツ、ベルリン)

Hebbel am Ufer: HAU

旧東ベルリンのフォルクスビューネ・アム・ローザ・ルクセンブルクプラッツを起源とし、現在、HAU(ハウ)という愛称で実験的な演劇やダンス作品を上演する劇場として広く知られている。かつては海外のアーティストを対象とするレジデンス事業を実施していたが、現在は青少年を対象とした教育普及事業「Houseclub」の一環として、ドイツ国内を中心に活動する演劇やダンス、音楽分野のアーティストを対象に地元の高校生と芸術的な問いを考えるレジデンス事業を実施している。滞在アーティストは2ヶ月間、HAUの施設を無償で使用することができ、4,000ユーロの制作費が支払われる。

URL: <http://www.hebbel-am-ufer.de/> (ドイツ語・英語)

### ニューヨーク・ライブ・アーツ [旧ダンス・シアター・ワークショップ] (米国、ニューヨーク)

New York Live Arts (Dance Theater Workshop: DTW)

ニューヨーク・ライブ・アーツは米国を代表する振付家を数多く輩出したダンス・シアター・ワークショップ(以下、DTW)とビル・T・ジョーンズ・アーニー・ゼーン・カンパニーが合併し、2011年に設立されたダンス専門の機関。DTWが創設された1965年から若手アーティストに創作と発表の機会を提供する「Fresh Tracks」と呼ばれるレジデンス事業を実施している。滞在アーティストは新しい作品の創作のためにスタジオを利用し、アーティストック・アドバイザーやダンスの専門家との対話の機会が与えられる。また、プロとしてのキャリア形成の支援として、ニューヨーク・ライブ・アーツのスタッフから助言を得ることもできる。

URL: <https://newyorklivearts.org/> (英語)

Email: [info@newyorklivearts.org](mailto:info@newyorklivearts.org)

### 台北国際芸術村(台湾、台北)

Taipei Artist Village

台北芸術村はTaipei Artist Village (TAV)とTreasure Hill Artist Village (THAV)の2つのレジデンス施設を拠点に、美術や映像、演劇、ダンス、文学等、異なる芸術分野で活動するアーティストを招へいし、対話やコラボレーションを促す事業を実施している。2019年の公募は2018年3月から開始予定。滞在アーティストには無償でスタジオと宿泊施設が提供されるが、渡航費や滞在費、活動費に関する費用は自己負担する必要がある。また、日本からのアーティストの招へい事業として、BankART 1929や秋吉台国際芸術村との国際交流事業を実施している。

URL: <http://www.artistvillage.org/> (中国語・英語)

Email: [tav@artistvillage.org](mailto:tav@artistvillage.org)

### 韓国国立現代美術館(韓国、ソウル)

National Museum of Modern and Contemporary Art, Korea

韓国国立現代美術館は美術作家の創作環境改善と韓国現代美術の国際化を目的とし、韓国国内外の美術作家や美術専門家との交流やネットワークの形成を促して新たな創作の機会を提供している。2018年の公募は2017年9月に受付が行なわれた。滞在アーティストには宿泊施設と月額100万韓国ウォンの助成金が提供される。また、カナダやオーストラリア、ドイツ、日本、台湾との国際交流事業を実施し、日本からのアーティストの招へい事業はトーキョーアーツアンドスペース(TOKAS)が窓口となっている。

URL: <http://www.mmca.go.kr/> (韓国語・英語・中国語)

Email: [mmcachangdong@gmail.com](mailto:mmcachangdong@gmail.com)

## viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第81号

2018年2月15日発行

編集人: 片山正夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0031 東京都中央区京橋3-12-7 京橋山本ビル4階

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: [foundation@saison.or.jp](mailto:foundation@saison.or.jp)

●次回発行予定: 2018年3月 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(92円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。